



北海道情報大学同窓会会報

第6号

発行

北海道情報大学
同窓会

同窓生の皆さんへ

北海道情報大学

学長 嘉数 侑昇



同窓生の皆さんいかがお過ごしでしょうか。

大学で培った、ITを武器に皆さんそれぞれの職場で大活躍のことに推察します。

原始林もそろそろ色づき始め、今年も蒼天祭のシーズンが近づき学生たちは張り切って準備に入っています。

早いもので、私が学長を拝命してからすでに一年半が過ぎようとしています。

一昨年の四月、五月には、今後の大学の在り方の参考にさせていただきたく、わが大学に関係の深い、皆さんの母校、道内五十の高

校を訪問させていただき各高の校長先生、教頭先生に直にお話をいただきましたことなど、つい昨日のように思い出されます。高校訪問の結果、私は多くのことを学びました。その中で印象深かったことは、各高校で先生方が授業は当然のこととして、課外活動や個別面談などを含めて、多くの時間を生徒の指導に充てているということでした。すべてを生徒の目線で物事をとらえ、一人ひとりの生徒の将来を真剣に考え実行なされていることに感動しました。

一般化はできませんが、大学ではややもすると学生の自主性の尊重という美名のもと、高校ほどには、学生一人ひとりの将来を考え実行していないのではないかと、と反省しきりです。私にとってこの貴重な経験を、高度人材育成の場である大学の在り方にどう反映しうるか、試行錯誤の一年半でした。それでは順不同に、これからこの一年半の北海道情報大学の状況をご報告させていただきましよう。

まずは、政府により制定された大学の第三者評価があります。こ

れは、すべての大学が四年ごとに受けることを義務化されたもので、大学運営、学生の授業評価、卒業生へのアンケートなどなど多岐にわたるものです。

一言で言えば、学生への教育サービスがちゃんと行われているか、のチェックです。評価結果は公表され、万が一悪い評価を下された場合は、想像したくもないような状況になります。北海道情報大学は来年の十一月頃にこれを受けることを予定しています。

評価されるということは、そのための準備を含めて多大な時間と労力を要しますので、大変で無駄ではないかという議論もあります。しかし、日頃情性に流されがちな大学の運営や、教育の仕方を、今一度教育サービスという視点からこれを積極的にとらえ、大学の在り方を見直す良い機会でもあります。

評価の中で、特にFDといわれるファカルティ・デベロップメント、平たく言えば、教官がちゃんと自分自身勉強して、これを講義や学生指導に活かしているのか、は評価の根幹をなすものです。

このため、たとえば新しく富士教授を委員長とするFD委員会が立ち上がりました。大学としての初の試みですが、外部から専門家に参加願ってカリキュラムを見直す、大学活性化運動、新任教員向けの講習会を行う、大学院の在り方を見直す、など九つのサブ委員会が活動を展開中です。

また昨年からは、授業をはじめとする学内外での個々の教員の活動の実態調査も行われています。

この一年半で教員や事務員の構成にも変化がありました。定年、転職などで大学を去られた方々がおられる反面、あらたに本学の教職員として採用された方々も数多くいらつしやいます。教員では特に医療情報分野、情報メディア分野には皆さんがまだご存じない方々がいらつしやるかと思えます。

情報大学ですから、ホームページが完備していれば、大学の現状はホームページ閲覧すればすぐにわかることです。残念ながら、いまだしっかりとしたホームページは開設されていません。いま理想的なホームページの設計段階でその開設に向けて準備中ですのでしばらくご猶予ください。その際は同窓会のページも併設されればと思っています。

学生の活動に話題を移しましょう。昨年と今年にかけて、ヨサコイソラン祭りでは本学は江別市のグループの主要メンバーとして大